

リンゴ農作業事故なぜ起こる

弘大グループ 安全な働き方研究

弘前大学の共同研究グループは18日、リンゴの農作業中にはしごから落ちる事故がどのように起こるのかを解明するため、弘前市の農園で人の動きをデータ化する実験を行った。津軽地方の基幹産業であるリンゴ栽培を現代の働き方にマッチさせるため、取ったデータは安全な作業の仕方などの安全基準をつくる参考に

する。
研究グループは付属病院の野村理医師(救急・災害



医学講座助教)、理工学研究科の佐川貢一教授、藤崎

和弘准教授らで構成。
弘前市緑ヶ丘の「もりやま園」で行った実験では、胴や肘、脚など全身にセン

サーを付けた農園スタッフがはしごに上り、右手でリンゴを収穫。動作の位置や速さの情報をコンピュータに記録した。これらのデータから、例えば、左手に持つ籠に何個のリンゴを入れば体のバランスを崩す可能性が高いか、などの目安を探る。

野村医師らのまとめによると、2015年1月〜19年8月に、リンゴ農作業中の頸髄損傷事故で付属病院の高度救命救急センターに運ばれた人は10人。原因別で

全身にセンサーを付け、はしごに上ってリンゴを収穫する農園スタッフ(左は野村医師

は、乗用草刈り機の運転中に頭を木に打つケースと、はしごなど高い所から落ちるケースがそれぞれ5人ずつあった。うち3人が寝たきりか寝たきりに近い状態となり、中には治療費が450万円を超えたケースもあったという。

もりやま園の森山聡彦社長は「私の母も40年以上前に大けがを負った。少しでも事故を予防する研究が進み、事故がなくなれば」と研究に期待をかけている。野村医師は「事故防止に向け、基礎データを取るのはいわれわれの大事な使命。今後、自動草刈り機の事故予防の有効性も検討していきたい」と話した。(福土和久)

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]弘前大学理工学研究科

E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp